

被災地での活動を振り返って

西成救助隊

階級 消防士長

氏名 福本 豊樹

派遣 第6次派遣

任務 救助



私は第6次派遣として命令を受けた。任務は『土砂内に取り残された人命の救助』であった。1月20日の15時30分、西成消防署を出発した。約7時間の道のりを経て石川県の消防学校へ到着、その日はそこで夜を明かした。

翌日の1月21日の5時に消防学校を出発し、3時間ほどかけて活動拠点となる輪島市立河原田小学校に到着した。河原田小学校への道中はこれまでの景色とは比べ物にならないほど悲惨な状況であった。道路は陥没し、家は崩れ、土砂崩れもあり、何もなければのどかな町なのにと感じたことを思い出す。河原田小学校に着くと間もなくミーティングが開始され、そのまま被災地へ向かい救出活動が開始された。天候のせいもあり、活動場所は足元が悪く、今にも崩れ落ちてきそうな危険な状況であった。翌日以降の天候は大荒れで強い寒波がやってくる予報のため、今後は更に状況が悪化する可能性が高く、もし救出活動が長引けば、先人の派遣隊員がやっとの思いで発見した要救助者を救出できないかもしれないという思いから、大阪府隊全隊員が『なにが何でも絶対に今日中に救出する』という強い気持ちで救出活動に従事した。活動が続ける中で予報どおり天候が荒れ、一時は豪雨の中で活動することもあった。それでも気持ちを切らすことなく、全員で声を掛け合い、少しでも要救助者に近づけるよう土砂を掘り進めた。掘り進めていくと要救助者の下にもう一人の要救助者がいるのを発見した。「絶対に二人共救出するぞ」という掛け声と共に大阪府隊の士気が一気に高まった。活動は日が沈んだあともずっと続いた。必死の思いで土砂を掘り進め、ようやく一名の救出者を救出することができた。家族の方が現場で立会い、発災以来の顔合わせで悲しい表情の中にもどこか見つかって良かったという表情を浮かべていたのを今でも鮮明に覚えている。

『あともう一人や』必死の思いで活動を続けた。日付が回る前で無念にもその日を活動は終了となった。もう一人を救出できなかった悔しさが心に纏わりついた。絶対に明日救出するという強い思いで次の日を迎えた。1月22日の活動は朝早くから始まり、前日に救出できなかった要救助者を一秒でも早く救出するという思いで活動を開始した。その日は幸いにも天候に恵まれ、午前中は天候が良く、作業開始から2時間ほど経過した時点でもう一名の要救助者を救出することができた。その日も家族の方が現場で立会い、次サイトへ向かう我々に頭を下げ見えなくなるまで見届けてくれた。家族が亡くなり、辛く悲しい気持ち

でいるなか、我々大阪府隊に感謝の気持ちを伝えてくださった。

その日の午後からは別の行方不明者情報がある被災地へ向かった。そこは土砂崩れで家が何百メートルも流されている状況であった。現地の輪島消防の職員でも地形が変わりすぎて前の景色を思い出せないというほどの被災状況であった。情報が少ない中でもなんとか土砂を掘り進めていったが、なかなか手掛かりを見つけることができなかった。その次の日も最終日も大変天候が悪く、雪が降り続く中でただひたすらに土砂を掘り進めていく活動が続いた。そんな中でも大阪府隊が一丸となり、1 cmでも奥に、1 cmでも深く掘り進めていく気持ちを全員が意思統一し、お互いで声を掛け合い続けた。たとえ見つけることができなくても声だけは絶対に届けようと全員が必死に活動していた。しかし、最終日も手掛かりすら発見することもできず、無念にも活動が終了してしまった。それでも大阪府隊が一丸となり、次の第7次派遣の隊員に繋がる最高の活動ができたと心から感じている。この派遣を通じて、自然災害の恐ろしさ、何でもない日常が失われる恐ろしさを身に染みて感じた。

現地の方は突然の大震災により平穏で幸せな日常の生活を奪われ、不安な状況の中であるにもかかわらず、それでも私が挨拶すると、「ありがとうございます」や「頑張ってください」など声をかけてくれる方がいた。これからもまだまだ厳しい生活が現地では続く。そんな中でも我々が現地で活動することで少しでも勇気を伝えることができたのなら、今回の派遣がすごく価値のあるものになったのではないかと思っている。この先、いつ同じような災害が起こるかは誰にも予想はつかない。しかし、いつ災害が起こっても我々消防が強い気持ちを保持し、声を張り上げ、必死で活動する姿を見せていくことができれば、少しでも地域の復興に近づいていけると私は信じている。能登、ファイト！

「当たり前は当たり前じゃない」

西成第2救急隊

階級 消防司令補

氏名 柏井 謙次郎

派遣 第8次

任務 救急



私は令和6年1月28日から2月2日までの6日間、第8次緊急消防援助隊大阪府隊の救急隊として石川県輪島市に派遣された。

29日の朝の6時30分に先遣隊との交代場所である日本航空石川高等学校に到着した。先遣隊からの申し送り宿営地である輪島消防署に向けて移動を開始した。悪路のため通常25分ほどで到着する道のりであるが倍以上の60分を費やした。

消防署に到着し、派遣救急隊の隊員全員（7隊22人）で今後の活動についてミーティン

グを行った。ミーティングの途中で最初の救急指令が入った。現地の救急体制は、輪島消防署が管轄する地域での救急事案には大阪府隊の救急隊が出場し、輪島消防署員が1名乗車して道案内など我々をサポートする体制となっている。救急の指令内容は「62歳男性 心肺停止」だった。柏原羽曳野藤井寺消防組合の救急隊が出場し対応にあたった。

救急出場以外は大阪府大隊指揮支援隊との業務調整や統計処理、避難所の巡回などを行っていた。輪島市には90カ所の避難所があり、移動距離や道路状況を考慮して各隊に巡回地区を振り分けていた。中には車両で接近することができない避難所もあるため、付近に車両を駐車して徒歩での巡回となった。巡回途中、原形をとどめていない倒壊した家屋や自分の背丈ほどまで隆起したマンホール、横倒しになったビル、焼け野原になった朝市の街並みなど、非現実的な光景を目の当たりにし震災の被害の深刻さを痛感した。また、発災から約1か月が経とうとしていたが「復興」というものを感じることはできなかった。

避難所では避難者数や避難者の健康状態、避難所の感染症の罹患状況などの聞き取りを行っていた。避難者と挨拶を交わす機会があり、「おはようございます。体調は大丈夫ですか？」と声をかけた。避難者は「大丈夫ですよ。ご苦労様です。」と笑顔で返答してくれた。ただ、それ以上の会話は進まなかった。というよりは何と声をかけていいのかがわからなかった。手を差し伸べるため、少しでも被災者に寄り添うためにこの場所へ来たのに何もできなかった自分に強く無力さを感じた。と同時に、被災者の方は先行き不透明の中、1日1日を必死に生きているが、私たちは6日間の派遣期間が終了すればまた普通の生活に戻ることができるということに何とも言えない感情を抱いた。

活動した4日間で私が所属した救急隊の救急出場はなかった。今回の緊急消防援助隊の派遣を通して、通常の災害と震災のような大災害は全くの別物であり普段の常識は全く通用しないと感じた。また、今普通の生活を家族と過ごせていることがどれだけ幸せなことを再認識した。「当たり前は当たり前じゃない」と。今後も、日本国民として継続的な支援を続けたい。

緊急消防援助隊（6次派遣）を終えて

西成救助隊

階級 消防司令補

氏名 福岡 弘隆

派遣 第6次派遣

任務 救助



今回の緊急消防援助隊の派遣では、一瞬で人の生活を変えてしまう自然災害の破壊力やその怖さはもちろん、我々人間の無力さを痛感した。しかし、被災者の方からのメッセージや、被災地でのたくさんの感謝の言葉を耳にする度に、私たち消防が少しでも被災者の

方々に勇気を与え、被災地の力になっていることを実感することができた。

これからも不安な日々はまだまだ続くが、一日も早く復興してほしいと強く感じる。そして、今回被災地で見えて肌で感じたことを心の中に刻み、伝えていくことが私たち緊急消防援助隊に派遣された隊員の使命だと感じる。

災害派遣を経験して

西成救助隊

階級 消防司令補

氏名 嵯峨 慶彦

派遣 第5次派遣

任務 救助



被災地への派遣中、強く心に残ったことは、避難所で暮らされている被災者の方々と接したことだ。我々大阪府隊の宿営地には避難所も併設されており、そこで生活している被災者の方々と挨拶をかわすことが度々あった。避難所はもちろん水は出ず、風呂もなく、公衆トイレ。身を寄せ合って寒さを凌いでいる中で、小さな子供もおり、胸が痛んだ。自分は派遣期間が終われば家に帰り変わらぬ日常が待っているが、被災者の方々は地震で大切な人や暮らしてきた家を失い、そして終わりの見えない避難所生活を強いられ、自分たちの生活もままならない中、我々消防隊とすれ違う度、感謝の言葉、激励の言葉を下さりました。私はこの仕事を選んで良かったと痛感すると共に、我々が活動へ向かう姿を見て、少しでも元気と安心を与えられたらと感じた。

災害派遣から得たもの

西成救助隊

階級 消防士長

氏名 山川 秀平

派遣 第4次派遣

任務 消火及び救助補助



活動を終了した際、我々の活動を見守っていたご家族の方が「本当にありがとうございます。ご迷惑おかけしました。」と我々に深々とお礼をしてくださった。私は何とも言えないやりきれなさで胸がいっぱいになった。その後も、宿営地の近くですれ違った住民の方々に、「ありがとうございます。ご迷惑おかけしました。」「ごくろうさまです。」と声をかけていただき、この方々の役に立つことはできたのだろうかかと自問自答し、自分の無力さを痛感した。

私が活動した場所は能登半島のごく一部である。私が活動した現場のような惨状が能登半島のいたるところで発生していると考えれば、自然災害の驚異は計り知れない。今後、未曾有の大災害が日本で発生するかもしれない。それは明日かもしれないし、10年後かもしれない。その来るべき時に備え、日頃から心身を鍛え上げ、自らの技術知識を練磨していくことこそ我々消防職員に求められることだと思う。